

広報

— 6 卷 1 号 —

昭和 49 年 1 月 20 日発行

目 次

視覚美と聴覚美	山 内 恭 彦…(2)
外国での越年の思い出	彌 永 昌 吉…(3)
南極の正月	小 口 高…(4)
石油とイスラエル	館 鄰…(5)
世界で一番古い岩	小 嶋 稔…(7)
私の読んだ本 (8)	小 堀 巖…(8)
岡田 要先生を偲んで	江 上 信 雄…(9)
《学部消息》	(10~12)



アオキ *Aucuba japonica* Thunb.

アオキ属はヒマラヤ・中国・日本を含む日華植物地理区に自生する。ヒマラヤアオキやシナアオキに比べると日本特産のアオキは2倍数の染色体を持つ進化した種と考えられている。最近になって九州・四国のアオキは染色体数が倍になっていないと判り、シナアオキ(中国・台湾)→アオキ(沖縄・九州・四国)→アオキ(本州・北海道)と分化したと推定されるようになった。常緑で美しい実をつけるアオキはヨーロッパで古くから非常に愛好されており、1712年にケンペルが *Aükuba* と呼んで紹介したのが最初である。初めの頃は雌株だけだったため実ができなかったが、雄株はやつと 1860年フォーチュンによって送られた。なおロンドンではアオキが公害に強いとすでに 1870年に記録されている。(大橋広好:植物)

視覚美と聴覚美

山内 恭彦 (物理・名誉教授)

一昨年末、古稀祝賀に対する多くの方々のお芳志に対する御礼として、“雑騒”という甚だ物騒な表題を付けた雑文集を自費出版してお届けした。もっとも出版費の大部分は祝賀宴のとき集めて下さった浄財によるもので、その上数社の出版社の編集員諸君の献身的骨折りがあったものだから、“自費”というのはいらないが、とにかく、奥付の定価のない書物を作ったのは愉快であった。部数が余ったので、平素御懇意を願っている方々にもお目に掛けた。

私は商売柄、多くの方々から書物を寄贈されるが、これはお互いのことと思って、滅多にお礼を書いたことがない。ところが、この雑文に対して沢山の礼状が寄せられたので、しまった、今迄大変失礼なことをしていたと始めて気がついた。物が物だけに、集ったお便りにはなかなか面白い批評もある。“雑騒どころか颯爽たるものです”などと、文学者に賞められたりして大いに気をよくした。(大変敬老精神に富んだ方だと感心した。) 思い掛けなかったのは、自然科学者畑の諸君からの礼状の中に、漢詩2首、和歌、俳句それぞれ数首ずつを発見したことである。しかもこの作者の中には、私から見ると、随分若い方々も含まれている。C. P. Snow の“2つの文化”というのはいずれも日本のことではないらしい。その後、朗人宗匠からも“母国”という句集を贈られた。

ここに取上げたいのは、医学部の先生だった吉田富三さんの俳句論である。吉田さんといえば、吉田肉腫(独立した生きた1個の癌細胞)で世界に名をとどろかせた癌の大家で、恩賜賞、文化勲章の榮に輝く我が学界の誇りであったことは御承知と思う。惜しくも昨年逝去された。私個人としても、よい友人を失ってまことに残念である。彼が一昨年贈ってくれた随想集“生命と言葉”の中に、“俳句と漢字”という小論がある。

吉田さんといえば、国語審議会で、“国語は漢字仮名交りをもって、その表記の正則とする”という提案をされて、大議論の種を播いたことは御記憶の方々もあろう。彼の俳句論は、要約すれば、俳句は知性の詩で、目で見ると漢字がエッセンシャルであるというらしい。芭蕉、蕪村から鬼城、蛇笏、虚子、達治などの名句を数多く引用して説明してあって、傾聴すべき点が少ないと思われる。(ただし、こう名句ばかり並べた本

の巻末に、自作未発表の百句を附けたのは少々まずかった?) ここで感じたことは、彼の美感が大変視覚的だったことである。

虚子の“行く秋の大和の国の薬師寺の塔の上なる一ひらの雲”は“行く秋や五重の塔に雲一つ”で十分であるという。たしかに、晩秋の澄み渡った青空に聳え立つ塔の上に、一片の白雲が流れかかっている状景、視覚的美としては十分であろう。しかし薬師寺の塔—これは実は三重の、あるいは見方によっては六重の塔である—といえ、遠く白鳳の文化がしのばれる。その塔のてっぺんの水煙には例の天人のすかし彫りの麗麗な姿が輝いている。そういう懐古的なあこがれは俳句では表わされていない。さらに、31字の中に6字の“の”の字を反復させる快いリズム感、17字の中には全く失われている。

そういえば、子規の写生論からもうかがわれるように、俳句には一瞬の状景を固定させた、絵画的のものが多。蕪村の“春の海ひねもすのたりたりかな”などは多少の時間的経過、リズムが感じられるが、やはり実朝の“大海のいそもどろによする波 われてくだけてさけて散るかも”のような動きに及ばない。

そう思って吉田さんの本を見直すと、セザンヌ、ゴッホ、ゴヤなどの絵画に深く心を寄せられた文は見出されるが、音楽に言及したものは一つもない。

物理学者には、プランク、アインシュタインなど音楽に堪能な人が少ない。我々の仲間にも、楽器を演奏する人は少ない。数学、理論物理のようなものは、論理をたどるものだから、やっぱり一瞬に感じとるものよりは、時間的経過に従って流れるものの方がびったりするのかもしれない。しかし、こういうものはどちらかというとな情的なもので、知的とは縁が薄い。いつも知的なものに没入しているから、時に情的なものに逃避するという言い訳もあろうが、それには何も音楽でなければならぬ必然性はなさそうである。

孔子は“詩に興り、礼に立ち、楽に成る”といった。この詩は俳句に限ることはなからうが、視覚美、聴覚美の双方に通じるのが理想であろう。久保亮五君や、霜田光一君の音楽は古くから聞かされていたが、両君が絵も上手なことを近頃初めて知って、大いに心を強くした次

外国での越年の思い出

彌 永 昌 吉 (数学・名誉教授)

私は 1931 年 8 月 (25 才のときであったが)、渡欧し、3 年間ヨーロッパに滞在した。その間に 3 回あちらのクリスマスやお正月を経験したわけである。滞在了国は、主としてドイツとフランスであったが、休暇中にはあちこち旅行もした。もう古いことであるし、日記もつけていなかったの、記憶のさだかでない点もあるが、1932 年から 33 年への越年のときは、三村征雄夫妻と一緒にフランスからイギリスに旅行し、英仏海峡の船の中でたしか新年を迎えたように思う。今日のように飛行機が発達していなかったから、Dieppe まで汽車で行き、何時間かを連絡船の上で過した。しかし、年が変るからといって、連絡船の上では特別の行事もなかったと思う。1932 年のクリスマスはパリで過したのであったが、フランスはカトリックの国で、深夜のミサに家族づれでゆくなど、宗教的・家族的な行事はあっても、街頭で Jingle Bell の音楽が鳴り響くようなことはなく、むしろ静かなクリスマスであった。

1931 年のクリスマスときは、ドイツのハンブルクにいた。第 1 次大戦やそれに続く inflation は、もう何年か前にすんでいたが、そのころのドイツはまだ疲弊していた。(2 年ほど後の 1933 年には、Hitler が首相となる。) 町の広場では“国営とみくじ”(Nationallotterie) などが売られていた。クリスマスのころになると、その広場に Stille Nacht, Heilige Nacht... の音楽が大きな音で流され、いかにも新教国のクリスマスらしい雰囲気が出される。その印象は今も忘れられない。

1933 年のクリスマスときもハンブルクにいた。その年のクリスマス・イーヴには、Emil Artin 教授のところに招かれた。教授はまだ 35 才の若さであったが、数学者としても、人物としても私たちの敬愛的であった。当時は夫人との間に満 1 才ほどの長女の Karin がおられた。私は町のおもちゃ屋で、Karin のための小さなおもちゃを買ってプレゼントしたが、お宅へ行き、ほかのおもちゃの側へおくとそれは小さ過ぎたようであった。——Karin は、今は Mrs. Tate として何人かのお子さんがあり、Artin 教授と同じように碧眼長身である。そのころはもちろんかわいい赤ちゃんであった。

パリには日本の大使館があり、ハンブルクには領事館がある。パリの当時の長岡大使は私の父の知り合いであり、ハンブルク領事館におられた青山義徳氏には、ベルリンの長井重歴山氏から紹介されたので親しくしていただいた。お正月には大使館や領事館で在留邦人を招かれる。上のようにして記憶をたどってみると、1932 年、1934 年のお正月は両方ともハンブルクにおり、1933 年にはロンドンにいたことになるが、ロンドンでは特にお正月らしい光景に接した記憶がなく、他方ハンブルクの領事館にも、パリの大使館にもお正月に招かれていったことがあるような気がする。あちらのお正月に特別の装いが無いのは普通であるが、1932 年から 33 年への越年を英仏海峡でしたといったのは間違いであったかもしれない。あるいは、パリの大使館でご馳走になったのは、お正月ではなくて、何か別の機会であったのかもしれない。その辺の記憶が不確実で申訳ないが、クリスマスについては、あちらへ行って最初の年 (1931) と、こちらへ帰る前の年 (1933) はハンブルクで、1932 年のときはパリで送ったのはたしかである。

戦後になってから、1960 年の夏に家内と一諸にヨーロッパに出掛け、ドイツ、フランス、スイスで夏休みを過した後、アメリカにゆき、秋から翌年 3 月まで北米合衆国にいた。アメリカで一番長くいたのはシカゴ大学であるが、クリスマスの休みには東部にゆき、プリンストン、ニューヨーク、ボストンで過した。家内は古くから聖公会の信者で、私も戦後洗礼を受けた。1960 年のクリスマス当日は、ニューヨークの NYU に近い Grosvenor Hotel に泊っていた。ちょうどその向いに聖公会の大きな教会があり、その礼拝に出席した。ニューヨークやボストンの町のクリスマスの装いも忘れぬが、一番印象的であったのは、ニューヨークのバスの station の一隅で (ご存じの方も多いと思うが、それは諸方へ行く路線のバスの出るところで、ずいぶん大きな建物である) あちこちの教会の合唱団が代る代るクリスマスの歌を唱っていたことである。混声のもあり、女声のもあり、子供を主とするのもあって、指揮者もいろいろであったが、唱っていたクリスマスの歌は私たちがよく知っ

ている classical なものであった。バスを待つ間、しばらく家内と一緒に聞き惚れていた。

ニューヨークからプリンストンへは、バスで一時間程である。クリスマス・イーヴの晩であったかどうか記憶が確かでないが、とにかくそれに近い日の晩、プリンストンの André Weil の家に家内と招かれた。一家の人たちと一緒に夕食をご馳走になった後、Weil が“君にも Santa Claus のものがあるよ”といって Simone Weil の *Ecrits de Londres* をプレゼントされた。André と Simone は兄妹であるが、Weil は思想家として著名な妹のことをあまり人に語ろうとはしない。しかし、Simone のことをいつも考えてはいるのである。実際、Simone ほどの妹をもてば、忘れることはできないであろう。

私は東大を 1967 年に定年退官したが、その年の秋からの 1 年間フランスのナンシー大学で過した。そのときも家内と一緒に出掛け、ナンシーの 82 Avenue Foch というところに住んだ。その年のクリスマスは、カードやプレゼントのやりとりはもちろんしたが、招いたり招かれたりはしなかった。ナンシーには聖公会の教会はな

いが、カトリックの教会はたくさんある。家から近い教会の深夜ミサに家内と一緒に参列した。少し寒かったがよいミサであった。(聖公会とカトリックでは儀式はほとんど同じである。)

1968 年の 1 月 1 日朝、少しゆっくり寝ていると、ベルの音で起された。家内が表のドアをあけてみると、雪の降る中に町のお菓子屋の女店員が立っていて、Jean Cartan さんからのお申付けです、といい、お菓子を一箱届けて来たのであった。フランスでは *étrenne* といって“お年玉”をおげる習慣がある。Jean Cartan は Henri Cartan の長男で、日本へ来られたことがあり、今は日本人の夫人を持っておられる。日本にも“お年玉”の習慣のあることを知って、私たちに贈物をされたのであったのかもしれない。(もっとも、日本では元日に物を届けてくれる店はないであろう。)

学会や委員会出席などのために、短期の旅行をしたことも入れれば、私もずいぶん何度も外国へ行ったことになるが、今まで外国で年を越したのは、以上の 5 回だけしかない。(1973 年 12 月記す)

南 極 の 正 月

小 口 高 (地球物理研究施設)

書き出しから妙な話になるが、昭和基地の住人は人間だけではなく小さなダニがいる。このダニは日本から運んで行ったものではないかと疑う人もいようであるがその道の専門家の話ではまぎれもなく昭和基地の先住者だそうである。何故それがわかるのかというと、外気温に対する活動度の依存性を調べてみると南極原産のダニは、温度は 10°C 位で最も活発に動きまわり、20°C に達すると動きは急激に鈍くなるが、日本産のダニは 20°~30°C 位で最も活発に動きまわるということである。もちろんいかに南極原産のダニでも気温が 0°C 以下に下れば冬眠状態になることはいうまでもない。

そこで昭和基地で気温が 0°C 以上になる日を調べてみると正月をはきんで 12 月と 1 月の間にたった 20 日位しかないことが知られる。つまりこのダニは 1 年 365 日のうちたった 20 日を目を覚まして餌を探し、残る 345 日を眠って暮していることになる。

海の中でも似たようなものらしい。昭和基地の正月に

は輸送の合い間、天気が悪くてヘリコプターが飛べない日には魚釣りが流行する。厚さ 2 m 程の氷に穴をあけて釣り糸を垂れると忽ち喰いつい上ってくるのが、オングルダボハゼと通称される口の大きい魚である。味は淡白でなかなか美味だが、この魚を釣るには実は餌は何でもよい。われわれも始めは肉の切れ端などをつけていたが、べにしょうがでもよいし何もつけずに針だけでもよいことはすぐわかる。何かが上から落ちて行くと何でもかまわず喰いつくらしい。恐らくそれは、海面近くから落ちて行く沖アミなどを常食としているので、落ちて行くものには何でも飛びつく習性ができているのであろう。

さらに面白いのはこの魚は一つの穴ではある数を限度として後はバツリ釣れなくなり、ほんの 2~3 m 離して別の所に穴をあけるとまた何匹かがつれるということである。一つの穴でつれる数は冬は少なく、正月頃になると急に増えるようである。つまりこの魚は底魚で余り

泳ぎまわることがなく、何か落ちて行くと、それが見える範囲にいるのが喰いついて釣り上げられ、その外にいるものは全く知らん顔だということであり、正月頃になればダニと同じようにいくばくか行動範囲が広がることを示している。これはまた、その程度しか動きまわらなくても十分餌にありついているということもある。この頃のように無闇に忙がしい人間の世の中から見れば何とも羨ましい優雅な生き方であるように思われる。

所で南極の人間の方は、どうかといえどもこれもある意味ではよく似ているといえなくもない。正月が休みになりのおんびりできるのは日本での話であって南極では一年中で一番忙しい交替と輸送の時期に当るからである。短かい交替の期間には数百トンの荷物の輸送と建物の建設や機械の入れかえなど目の回るような有様になり、陽が一日中沈まないことも手伝って、眠る間もない労働の季節となる。顔はサングラスの跡を白く残して雪やけし、めがね痕のような形相になり、きたならしい作業衣で砂ぼこりにまみれて働いている姿はそれだけでもおよそ正月とは縁の遠い眺めである。

正月らしさというものは暦の上の区切りに伴ってともかくも生活に何かの区切りをつけ、あるいは区切りをつけたような気になって暫くの休養をとり、何とはなし新しい気分の仕事にとりかかる一つの休止期間だといえ

るだろう。東京では正月三日にはスモッグもなくなり、富士山がきれいに眺められるということになる。寒さ、雪、ストーブ、年賀状、雑煮、みかん、新年会などがそれに色を添える。なる程交替のヘリコプター第一便では新鮮なオレンジや、野菜、家族や友人からの便りをお年玉として届けてくれるし、また輸送の最中に天候が悪くなり輸送の休止期間もあるが、オレンジにみかんを思い、手紙の束に年賀状を思うことは余りない。休みはただの休みであって全体は活動の季節であり、活動は連続で、気分の上でも実際面でも全く区別がないからであり、一日中沈まない太陽だの、一年中で一番気温の高いことなどがますます正月らしくない方の気分を拍車をかける。

今頃は新しい人達と越冬を済ませた人達が共同の輸送や建設に従事している頃である。相も変わらず、目を覚したダニや魚と一緒に真夏の営みに真黒になって働いているに違いない。正月の終りには一年を何日かで暮すダニ達は眠りに這入り、魚達も動きが鈍くなり、人間はといえば、越冬した仲間は基地を去り、新しく行った仲間は冬ごもりの仕度にかかる。人間を含めて南極で暮す生き物にとっては六月末の南半球の冬至の日の方がずっと正月の気分に近い。気分を新たにするにはやはりある種の自然の区切りが必要なのである。

石油とイスラエル

たち
館

ちかし
鄰 (動物)

ヨム・キップール戦争と俗に呼ばれる第4次中東戦争が10月に起こって以来、アラブ諸国の「石油戦略」が効果的に実行に移され、新聞でもアラブ諸国に関連したニュースが多く載せられるようになった。まさに、対アラブ総力外交戦といった感じなのであるが、こうした時にこそ、イスラエルに視点を合わせた見方が必要なのはなからうか？ イザヤ・ベンダサン「日本人とユダヤ人」から、ユダヤの教えを孫引きさせて頂くと、「満場一致は何かおかしい」のである。

私は昨年迄、足かけ7年程イスラエルのワイツマン研究所に滞在していたのだが、最近多くの方から受ける質問は「イスラエルの為にどうして世界中がこのように騒がねばならぬのか？」という主旨のものである。社会的に有力なユダヤ人の多いアメリカはともかくとしても、ヨーロッパの諸国が、頑固と思える程に、アラブの石油

戦略に対抗しているのが不可解だというのが質問の骨子であると思われる。勿論このような質問に生物学者である私が正確に答えられる自信はなく、又、明快な回答がある筈もないが、大まかに私なりの考えをまとめてみたい。

イスラエルと言った時に、普通の日本人に浮かぶイメージはどのようなものであろうか？ 残念乍ら、今の私にはばくぜんと想像するしかない。しかし西欧諸国の人人に抱かれているイスラエルの平均的な像は「中東にユダヤ人が作った小さな近代国家。資源らしい資源は殆んどなく、強大なアラブ諸国に囲まれ、教育程度の高い、優れた、勤勉な国民が、進んだ科学技術を支えとして、福祉国家建設を目標に生きている国」といったものではないかと思われる。イスラエルの広報印刷物によく見受けられるのも、大体この線であり、実際に住んでみて

このイメージが特に作為的な強調を含んでいるとは感じられない。

さて、このイメージの内容は多くの先進国又は“中進国”にあてはまるもので、決してイスラエルに特有なものではない。先の文の中で、中東、ユダヤ人、アラブといった言葉を除けば、それが、オランダ、デンマーク、イギリス、或いは日本のことだと言っても不都合はあるまい。日本の場合には、隣国と地続きの国境こそないが、中国、アメリカそしてソ連と、超大国に周囲をとりまかれ、少い資源で、高い教育程度と、勤勉さを資本とし、円滑な貿易活動を頼りに、激しい世界の潮流の中で生計を立てているのである。

このような国々が資源の強大国、或いは軍事、資本の強大国からの圧力にいかにか弱いかは今度の石油戦争で我が痛切に経験していることである。国境を相接したヨーロッパの国々では、国家相互間の関連も深く、又それだけに、お互いの警戒心も強くなるのであろう。西ドイツ、フランス、或いはイギリスといった“強大国”ですら、アメリカ、ソ連又は英独仏三国間の複雑な力関係に対する警戒の念をゆるめ得ないのであるから、小さな国ではなおさらのことだと思われる。

ヨーロッパ諸国の人人が、イスラエルの置かれている現実を身近かなものと受け取り、その運命を「明日は我が身」と感じているとしても不思議ではない。Power politics の横行する中で、小国はどこ迄大國の圧力に抵抗し、“独立”を全うし得るのであろうか？

ここで、イスラエルこそ Power politics の代弁者であり、好戦的な帝国主義国家なので、アラブはその被害者だという見方は、当を得たものだと思えない。イスラエルにも、軍国的ショービニスト、経済帝国主義国家という側面があることを否定するつもりは無いが、それは日本人が GNP ショービニストであり、経済帝国主義者だということと似た程度のものである。大きなだけに、日本の方がはるかに罪は深かろう。近頃話題になるキーセン観光はほんの一つの症候に過ぎないのである。

イスラエルが現在の占領地域をなかなか手離さないのは、アラブ諸国に対する恐怖と不信の故であるというイスラエルの主張を、私は素直に受け入れた。

イスラエルのパレスチナの地に対する歴史的な権利が正当かどうか、というところから議論をする勇氣は私には無い。この議論はまるでメビウスの輪をたぐるように、可被害者と被害者が入れかわり、果てしなく思えるのである。サルトルもこうした論争にさじを投げた一人である。ただ、ドイツチャーのように、イスラエルの建国に反対する思想的立場もあり、又現在の政治状況に批判

的なユダヤ人知識人も多いことはつけ加えておく必要がある。しかし、西欧諸国では、イスラエルの国家としての存否を問う姿勢は、もはや全く失われていると言っても過言ではあるまい。

第2次大戦のナチの亡霊は、大國に接して生きる人人の胸にまだ出沒する。私共は原爆の恐怖を年と共に忘れてゆくが、記憶のうすれることは、現実の危険が無くなることでは勿論ない。

原則論の“立て前”を離れた、エネルギー外交、資源外交といった即物的な外交路線には、本来我々が避けようとしている落とし穴に自ら飛び込む可能性があまりに多く秘められているように感じられる。対米一辺倒からの離脱どころか、ますます一つのバスケットに卵を積み込んでいるのが現状なのではなからうか？ 日本の失うものは大きいのではないだろうか？石油だけが我々が外にたよっているものではないのである。

私は、6日戦争以後のイスラエルの政治的立場を盲目的に支持している訳では決してない。アバタもエクボと、イスラエルを愛する必然性が、日本人の私にないのは当然であろう。パレスチナの避難民の処遇を巡って、或いは彼らの残した財産の処分に関して、又占領地域の支配に関して、イスラエルも痛い傷を沢山持っている。占領地域のアラブ人の独立運動については、いくつかの優れた本が書かれている。しかし、イスラエルが周辺のアラブ諸国の社会に与えたプラスの影響も又大きい。

寒さにふるえ、物価高におびえ乍らこの小文を書いている私に、原油の重要性がわからぬ筈はない。しかし、原油の不足と、イスラエルの問題は、密接な関係がありそうで、実は全く別のことなのではなからうか？ 本来関係の無いことなのではないだろうか？

世界の人口増加と、生活程度の向上が、いずれ資源の涸渇を招き、いわゆる資源保有国が、資源保護に傾くのは当然であろう。我々が直面しているのは、単に今度の中東戦争の結果ではなくて、未来の文明社会の現実であり、又近代國家の独立とは何かといった問題なのであろう。

ずい分遠まわしのようだが、これが、冒頭の質問への私なりの答えである。

手うすだった中東外交（イスラエル外交も含めて）が見直されることは、私にとって極めて嬉しいことである。ユダヤ人とアラブ人とは、元來文化的にも近く、中東問題の理解には、両方を理解することが必要な筈である。そしてこのような努力は、もともと中東戦争とは関わりなく行われるべきものであって、いたずらにアラブ諸国とイスラエルを対極に置いて一方に猛進したのでは、

文化国家日本も、片寄った利益の走狗に過ぎなくなってしまおうのではないかと思うのである。

中東の風土は、かつてユダヤ教、キリスト教、イスラ

ム教を生み、世界の動きに大きな影響を与えた。クリスマスの鐘の響くエルサレムの丘は、又我々に大きな問題を提示しているのではなからうか？

世界で一番古い岩

小 嶋 稔 (地球物理)

昨年は、私たちの研究室に、“世界最古の岩石”が東と西からほとんど同時に持ち込まれるという幸運にめぐり合った。ひとつは、昨年10月から地球物理教室の助手として留学先のパリ大学から帰国した兼岡一郎さんが持ち帰ったもの。もうひとつは、京都での国際会議出席をかね、地球物理教室に3カ月ほど滞在することになったカナダ地質調査所のシュワルツ (Dr. E. Schwarz) さんが持ってきたものである。

時を同じにして東と西からやって来たこの“世界最古の岩”は、どちらもグリーンランドの東部海岸に産出する変成岩の一種である。兼岡さんが持ち帰ったのは、約30グラム程度の大きさで、プラスチックの台にはめこまれ、裏にOxfordとするしてある。他方シュワルツさんは、東大滞在中の研究試料として段ボールの箱に一杯、10キロほど持ってきた。

このグリーンランド産の変成岩は1969年オックスフォード大学の研究者により採集され、ルビジュウムーストロンチウム法により詳しい年代測定が行なわれた。年代値は39億年と報告されている。もっともルビジュウムの半減期には、現在でも5パーセント程度の不確かさが残っているので、短い方の半減期を用いて計算すると37億年ということになる。いずれにしても現在まで報告された地球上の岩石のどれよりも古い。

地球がほぼ現在のような規模の天体として太陽系内に存在し始めたのは、今から45億年程前だったと推定されている。地球上の鉛鉱床や隕石中の鉛の同位体組成の研究に基いた結論である。1950年代の後半に同位体比を用いた岩石の絶対年代測定法が導入されて以来、現在まで全世界で行なわれた年代測定はおそらく万を越えるものであろう。しかしいまだかつて40億年を越す岩石は発見されていない。われわれの探し方がまだ充分でないということであろうか。地球の歴史については、39億年の岩石を最古の手懸りに、それから先の45億年までについては全く何の手懸りも得られていない。地球科学者はこの空白の歴史に、地球の歴史の“暗黒の5億年”という、ロマンチックな名を与えている。

“暗黒の5億年”は、しかし唯たんにわれわれの探し方の不足のみ押しつけるわけにはいかないようである。地球が誕生した時は、まだ冷く、5億年程たってようやく火山活動が起る程度に熱くなったためと考える人もある。他方、地球が生れた頃は今よりもっと火山活動が激しかったと考え、“暗黒の5億年”を説明しようとする試みもある。この立場によれば、40億年以前にできた岩石はその当時の激しい火山活動のためすっかり壊されてしまっていて最早手にすることができない、ということになる。事実、火山活動が地球の全歴史を通じほぼ現在と同じ程度に起ったと仮定すると、40億年前の岩が現在まで地表に生きながらえる確率はきわめて小さいことが統計的に示される。

“暗黒の5億年”に対するいろいろな解釈のうちどれが正しいのか現在の所依然として謎である。小さなプラスチックの台にはめこまれた“最古の岩”は、驚くほどフレッシュである。キラキラ輝く結晶粒は、とうてい40億年の星霜を経たものとは思えない程、肉眼には風化の痕跡すら認められない。しかし一目にはどこにでも転っているのと何の変哲もない岩だが、“暗黒の5億年”やその他地球のごく初期の状態につきかけがえのない情報を秘めているはずである。

シュワルツさんと協同で地球物理教室の河野長さんは、この最古の岩の残留磁化から40億年前の地球磁場強度を推定しようと試みている。アポロ宇宙船が持ち帰った月岩石の研究から、この月岩石は現在の地球磁場の約1/20の磁場下で残留磁化を獲得したと推定されている。この磁場の起源については今でもはっきりした答えが与えられていない。一昨年ノーベル賞を受賞したアルベンは、40億年程前地球磁場が現在より数100程強く、この磁場が月まで及んでいたためだと提案している。ちょっと信じ難い話だが、この39億年前にできた岩石の残留磁化をしらべれば、この問題の解決にかなりの手懸りが得られそうである。

“最古の岩石”が秘めている情報は磁化に限らない。地球の大気が何時頃から形成されたか、この問題は私達

研究室の共通の関心事である。“最古の岩石”に含まれる極微量の稀ガスの同位体比をしらべれば、大気の起源につき何らかの手懸りが得られるかも知れない。

キラキラ輝く結晶粒をちりばめた黒っぽい“世界最古の岩”を眺め、あれこれ想像を楽しんでいるうちに正月休みも終わった次第でした。

私の読んだ本 (8)

イ. 倉石武四郎

「中国語五十年」(岩波新書, 1973)

ロ. 富山妙子

「わたしの解放—辺境と底辺の旅」(筑摩書房, 1972)

小 堀 巖 (地理)

イ. の倉石先生は、今年の朝日賞を受けられ、また、先生編の「岩波中国語辞典」の恩恵にあずかっておられる方も少なくあるまい。私は最初、“中国地理学史”を勉強していたので、欧米のシノロジストに知人が多いが、“日本の教授で最も完璧な中国語を話す方”というのが、倉石先生に対する国際的な評価である。いわゆる漢文訓読の不合理を早くから唱え、現代中国語の発音で古典をよみ下すというある意味ではきわめて当り前の事を実行するのに、著者は学界の抵抗の中にその前半生をかけ、後年京大教授から東大教授にうつられる頃からそのすぐれた古典に対する教養の上に、現代中国語の教育、研究に情熱をもやされる。特に戦後は、中華人民共和国の成立にともない、中国語教育にも国内では幾多の難題が出てきた。先生は、それを一つ一つ片付けてゆく。東大に教養学部ができたとき中国語クラスを残すために努力された話や、謝冰心女史が、米国に帰りますとあって、そのまま北京に入った話など、中国語研究戦後史の一頁が坦々とのべられている。著者が、1954年、20数年ぶりで北京に招待され、“文字改革研究委員会”との座談会に出席し、はじめは中国側の通訳が出たが、専門語が入ってきたのでお手上げになり、先生にお鉢がまわり、“……破れかぶれ、へたな中国語でやってのけました”といわれる謙虚な先生は、日中国交回復時の田中・周会談の通訳をつとめた中国の人々へあたたかいまなざしをおくり、ある日本の大会社の重役が、随行した通訳にむかって「オイ通弁！」とよびつけたので、その通訳が「もうこんな仕事はいたしません」と涙ながらにうったえた話もつたえる。「中国との友好は、けっして相互の利益によってのみ結ばれるものではない、よくあいてのころをとらえてこそ、たがいに手をにぎることができ

る。そのころをとらえるための、ひとつの道はことばである。しかし日本人はこの大切なことばを二千年に近く無視してきた。わたくしはいささかのいきどおりをこめてこの書物をまとめた。わたくしは、ふたたび、このような書物を書くだけの寿命を持たないであろう。したがってこれはわたくしの日本にたいする遺書ともいえよう。(ゴジは評者)」という締めくくりの文句は、この著者の説く場合、万金の重みで訴えるものがある。一つの語学への道が、いかにけわしいか、安易な語学感を吹き飛ばす壮絶な書物である。

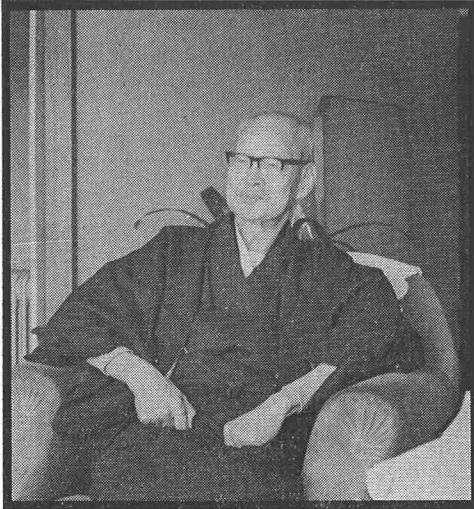
ロ. の著者の富山妙子さんは、外資系の会社につとめる父の下で、アカシアの大連でしあわせな女性としての道をあゆめる基礎をもっていた。しかし植民地の少女として感じとった日本の姿に大きな疑惑を感じ、自由への憧憬から、東京に戻って新しい美術運動に身を投じてゆく。戦火のなかの恋愛を通じ著者自身の生活のなかに次第に革命がおこってくる。やがて終戦、子供をかかえ、夫と別れた著者は、炭坑に絵画のレアリテをもとめて、筑豊の山々をあるく。そこで知った労働者の生活を通して日本社会の構造に大きな疑問をいただく。炭鉱→鉱山労働者という線で、移民船ののって南半球を訪れ、アンデスの国々で絵画をえがきながら、次第にその社会の矛盾に心をひかれてゆく。生活と闘い、絵を売りながらの著者の旅は、やがてソビエト、ヨーロッパ、中近東、インドとのび、自由の問題や、いのちの極限について身を以て考える。大学闘争が盛んなる頃、著者は、日本、朝鮮の問題に心をうばわれ、韓国旅行は、やがて徐勝君らを支援する市民運動に展開してゆく。日中国交回復の日にあとがきが書かれたこの書物は、一人の日本人女性画家の半世紀の生涯を語りながら、おのずから日本現代史の

一部をかたちづいている。373 頁の大著の中には、各時代を彷彿とさせる無数の詩文など挿入されており、著者なりのきびしい日本の戦争責任の追及が全篇の基礎の

調子となっている。この一人の女性の魂の旅は、一人でも多くの、特に若い女性や、中年以後の男性に読んで欲しいものである。

岡田 要先生を偲んで

江 上 信 雄 (動物)



名誉教授岡田 要先生の立派なお姿には、もう接することができない。賑やかに学生にハッパをかけ、学問を論じておられたあの大きな声を再びきくことはない。先生は旧臘 12 月 26 日東大病院で帰らぬ人となってしまった。御年 82 才。

先生は大正 7 年東京帝国大学理科大学動物学科を御卒業、しばらく三崎の臨海実験所で仕事をされた後大正 13 年から 6 年余りフランス、イギリス、ドイツの各地で動物実験形態学に関する多くの研究成果をあげられた。その後京都大学教授として、実験発生学を開講され多くの学生にこの学問の醍醐味を与えられた。昭和 14 年東京大学に來られ、われわれが直接先生の教えをうけることとなった。講義はほとんど先生御自身の天才的で個性的な研究を中心に進められ、実習や実験でモタモタしていると「そんなアホなことをいつまでもやっつるのか」と一喝された。先生の学生指導方針は誠に自然に学べということのようであった。発生におけるオーガナイザーの役割、多彩な動物の再生における極性と神経の役割の研究、性転換の研究などは後世の学問に多くの影

響を与えた業績といえよう。

戦後間もなくの困難な混乱期 (昭和 21 年から 24 年まで) に理学部長を勤められ、教養学部や教育学部の設立にも力を尽されていた頃の先生は、夜おそくまで仕事をされていたことが多かった。それでもゆとりを失なわず我々に対してはいつもユーモアを忘れず接しておられたことは、今にしておもうと並の人間のできることではなかったといえる。

日本動物学会の会頭をはじめ多くの学会の会長に選ばれ、日本学士院会員、日本学術会議第 4 部長、国立遺伝学研究所評議会議長、日本学術振興会理事等々として、学問の発展や世界交流に尽力された功績も誠に大きいものがあつた。昭和 27 年の御停年後は永く科学博物館長をつとめられ、その後も東京動物園協会、日本博物館協会などの多くの御仕事を通じて研究面だけでなく社会教育、科学の普及などでも市広い活躍をされた。

真剣に顕微鏡を見てから美しいスケッチを描いておられたお姿を想い出し、また晩年になって御自分の御仕事をふりかえってうれしそうに話されたり、性の分化についての新しい問題提出などをして楽しんでおられた時期が長かったと思ひ浮かべることが、先生の死という悲しい思いに対するせめてもの救いである。

岡田先生の専門的な論文は数が多いので主要なものをえらびにくいのですが、その中から 2, 3 をひろっておきます。

Études sur la régénération chez les coelentérés.

Archives de Zoologie expérimentale et générale.
T. 66.

Transplantationsversuche an Protozoen. Archiv für Protistenkunde. Bd. 69: Ht. 1.

Sex reversal in the Serranid fish, *Sacura margaritacea*, I. Sex characters and changes in gonads during reversal. Proc. Japan Acad. Vol. 41.

(御写真は昭和46年門下生一同が集まった際のお姿です)

12月理学部会合日誌

- 5日(水) 13:30~15:30 教務委員会
10日(月) 14:00~16:00 理学系研究科委員会
12日(水) 13:00~15:00 人事委員会
17日(月) 12:30~14:50 学部長と理職の定例交渉
19日(水) 14:00~17:10 教授会

教授会メモ

12月19日(水) 定例教授会

理学部化学新館講堂

教授会にさきだち河田教授(数学)が「動く対象集団に対する標本調査」と題して、映画をも併せて約一時間興味深い講演をされた。以下に当日配られた講演要旨を再録する。

動く対象集団に対する標本調査

河田 敬義(数学)

ここでは、ある地域に生息する野生動物の個体総数を調べる統計的な方法について述べる。従来は、捕獲一再捕獲法といわれる方法が統計学で研究されていたが、ノウサギについて行なった実際の経験では前提条件が、きびしすぎることもおよび実施困難のため机上の空論のように思われた。そこでノウサギについて、積雪地方だけに用いる方法であるが、雪の上の足跡をもとにする方法が考えられた。この方法は動くものを固定して把握する方法である。ノウサギの夜行性を利用し、対象地域内に一夜のうちについた足跡の総延長を X とする。次に、一匹のノウサギの一夜のうちに行動する足跡の平均距離を L とする。そのとき X/L によって、全数が推定される。総延長を調べるには、標本調査法・幾何確率モデルによる推定を基礎とする調査法が用いられる。一匹の平均距離を知るには色素首輪による方法の外、自然の足跡を追跡し、他の足跡と交わって本来の足跡が不明のとき、ランダムに選んで一夜の始点を見出し、このようにして得られる測定値について確率モデルを作り、コンピューター・シミュレーションおよびベイズ推論を用いて、 L を推定する方法を採用する。

以上の研究は統計数理研究所の林 知己夫氏を班長とする研究グループによってなされたものであり、映画「ノウサギを数える」(30分間)によって説明した。(この問題について興味のある方々に、一番手近な文献

として「数理科学」の1973年8月号“特集 ランダムネス”をおすすめしたい。特に冒頭の林 知己夫“ランダムネス”はいい手がかりになる。なお一層の興味をおもちの方は直接私に御連絡頂ければ幸甚である。河田記)

1. 前回議事録の承認
2. 人事異動等の報告・承認
3. 教務委員会報告

岩堀教授より、情報科学入門実習(いわゆる算盤塾)についての説明があった。また新学期の非常勤講師手続きについて報告があった。ついで臨時カリキュラム委員会の活動現況について島村教授より説明があり、また全学ゼミに対する理学部の一層の関心が希望された。

4. 人事委員会報告
5. 会計委員会報告

田丸教授より、営繕工事関係の学部内の順位査定がしめされ承認された。また部長保留金の使途について学部長より新任教授へ研究費として配分する原案が示され承認された。

6. 将来計画委員会報告
7. その他

学部長より、評議会の決定として、従来の“協議会”がなくなったことの報告があり、続いて、建物問題の進捗状況についての説明があった。一般的に最近のきびしい緊縮財政事情などから建設の時期についても、若干の影響はまぬがれない模様である。そのあと概算要求について説明があった。

東大百年史編集理学部委員会委員名簿*

委員長	田丸	教授
数 学	伊藤	教授
物 理	木原	教授
天 文	上条	助 授
地 球	浅田	教授
化 学	藤原	教授
生 化	森田	助 授
動 物	江上	教授
植 物	佐藤	助 授
人 類	渡辺	教授
地 質	木村	教授
鉱 物	武田	講師
地 理	吉川	教授
臨 海	重井	講師

植物園 古 沢 助 教授
 地物研 福 島 教 授
 情報研 高 橋 教 授
 中央 吉 野 事務長

事務担当 石崎事務官(大学院掛)

* (12. 19 の教授会において承認されたもの)

加納さん御苦労様でした

青山将彦(植物)

2号館, 植物で長年にわたり木工に従事してこられた加納さんが, 昨年 12 月末日で停年退職されました。毎

日こつこつと手作りの木工製品の製作に励んでこられました。私達のまわりには加納さんの製作または, 修理した実験台, 薬品棚, 棚等多数あります。板 1 枚切るにも, 1 ミリたりともくるといけないように注意して切る。何時だったか, 「この位の板を…」とお願ひしたところ, 「この位ではそこにおさまるかどうかわからないから, はっきりした寸法を」と言われました。いい加減な仕事は寸分たりともすることのできない方でした。体は小さいが職人氣質の強い方でした。私達はこれからいろいろ不便な思いをしなければならないが, その都度加納さんを思い出すことでしょう。

これからもお身体にお気を付けて末長く御健で。

人 事 異 動

(助 手)		氏 名	発令年月日	異 動 内 容	備 考
教室	官職				
鉍 物 助 手		末 野 重 穂	48. 11. 14	退 職	
化 学	"	村 江 達 士	48. 12. 1	採 用	
(講師以上)		氏 名	発令年月日	異 動 内 容	備 考
教室	官職				
物 理 教 授		橋 本 英 典	48. 12. 1	東京大学教授理学部に配置換する	宇宙航空研より
生 化 講 師		高 橋 健 治	49. 1. 1	京都大学霊長類研究所教授に昇任	

12 月 海 外 渡 航 者

教室	職名	氏 名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
物 理	助 教 授	中 井 浩 二	アメリカ合衆国	12. 10~49. 2. 28	ミュー中間子スピン回転の研究
動 物	助 手	館 鄰	アメリカ合衆国 ブ ラ ジ ル カ ナ ダ	11. 28~ 12. 13	国際基礎生物学シンポジウムに出席並びにアメリカ合衆国およびカナダの大学・研究所にて研究連絡

理 学 博 士 学 位 授 与 者

昭和 48 年 12 月 10 日授与者

専門課程	氏 名	論 文 題 目
化 学	李 正 熙	A Study of New Heteroaromatic Systems. (新しいヘテロ芳香族系の研究)
学位規則第 3 条 2 項該当	長 谷 川 政 美	原子価結合法および分子軌道法による水素結合の研究
同	林 利 彦	Interactions of Collagen Molecules. (コラーゲン分子の相互作用)
同	鈴 木 正 男	Chronology of Prehistoric human activity in Kanto, Japan. (関東における先史人類活動の編年)

学部長と理職との交渉

12月17日(月) 12時35分~2時50分

出席者: 理学部側は学部長, 事務長ほか4名

理職側は委員長ほか11名

議題: 1. 職員待遇改善について, 2. 賃上げについて, 3. 5号館問題について, 4. 臨職問題について, 5. その他

1. および 4. 学部長, 事務長よりつぎの説明があった。
 - 1) 臨時職員の協議採用, 手当等の待遇改善については, 規則に従って最善のことをしている。
 - 2) 行一, 行二の昇格, 昇級は, 機会のあるごとにやっている。
 - 3) 助手を全員3等級とし, 全員に大学院手当を出すべしという要望が理学部部長会議から出されている。大学院手当を4%から8%に増額することは, 次回の会議にはかかってみる。
 - 4) その他, 特昇, 超勤手当, 高齢者昇給延伸等について意見が交換された。これらについては, 理職が要点をまとめて改めて質問する。
2. 0.3カ月分が繰り上げ支給されるが, これで充分とはいきれない。理職の賃上げ要求は, 学部長が総長にとりつぐ。
3. 理学部建物計画の現状について説明があり, 理職より改めて厚生施設の要求があった。

外国人留学生と教授との懇談会

外国人学生委員齋藤信房教授の招待で, 理学部関係の外国人留学生, 研究員との懇談会が, 12月6日16.00~18.40の間, 理学部四号館会議室で開催された。部長, 評議員, 関係教室の教官がホスト側となり, 大学院留学生(22名), 学部留学生(2名), 学振奨励研究員(1名), 学振流動研究員(2名), 外国人客員研究員(3名)〔以上いずれも48.1.21現在〕のなかから約15名の出席があった。最年長者70才のH. Bobek教授(地理, ウィーン大)から紅一点の関 恩基さん(鉱物, ソ

ウル大)まで, それぞれ自己紹介があり, 後半は, 指名しあいながらなごやかな歌声がひびいた。留学生諸君にとってのもたのしい一夕であったようで, 来年の再会を期して名残りを惜しみながら散会した。

編集後記 年末年始の休みにかかり一月号はいつもより10日ほどおくれましたが, 内容としては正月号にふさわしいものをねらってみました。珠玉の名随筆を寄せられた山内先生, 味わい深い越年の思い出を語られた弥永先生については, 今更御紹介するまでもありませんが, いずれもお願いしてから一週間もたたぬ内に原稿を頂き, 編集部が恐縮してしまいました。加納さんの記事を書かれた青山さんは, 植物学教室の温室で活躍しています。南極の小口先生(第十二次隊長), 小嶋先生(昨年“地球はいつ生れたか UP 選書”という好著を出された)いずれも年末に御無理をお願いしました。また, 国際会議の報告をお願いに行ったら, “イスラエル問題を書きましよう”ということで, 石油問題の盾の反面を執筆された館博士の文章は, 偶然とはいえ, 読者の興味をひく話題と思います。

2月号は, なるべく予定通り発行するつもりですが, これから一番忙しい学年末にかかりますので, 若干のズレは御寛容下さい。また今月号は「私の提案」は休載しました。続きものとしては一寸無理のようなので随時掲載ということで幅をもたせたいと思っています。

広報は, 各教室に編集員をおくという体制をとっておりませんので, いろいろな研究, 教育に関する話題は, 口コミにたよらざるを得ません。どのような方法でも可ですから, 各研究室の話題を教えてくださいと幸甚です。

尚, 12月号の編集後記にのせたイザヤ書の冒頭は, 「斯く……」を「斯て……」と訂正します。



〔エジプト象形文字による謹賀新年〕

編集: 〔小堀 巖 (地理) 理2号館205号室 内線6449〕
〔清水忠雄 (物理) 理1号館372号室 内線2783〕